

ちい 小さな

しん し 紳士

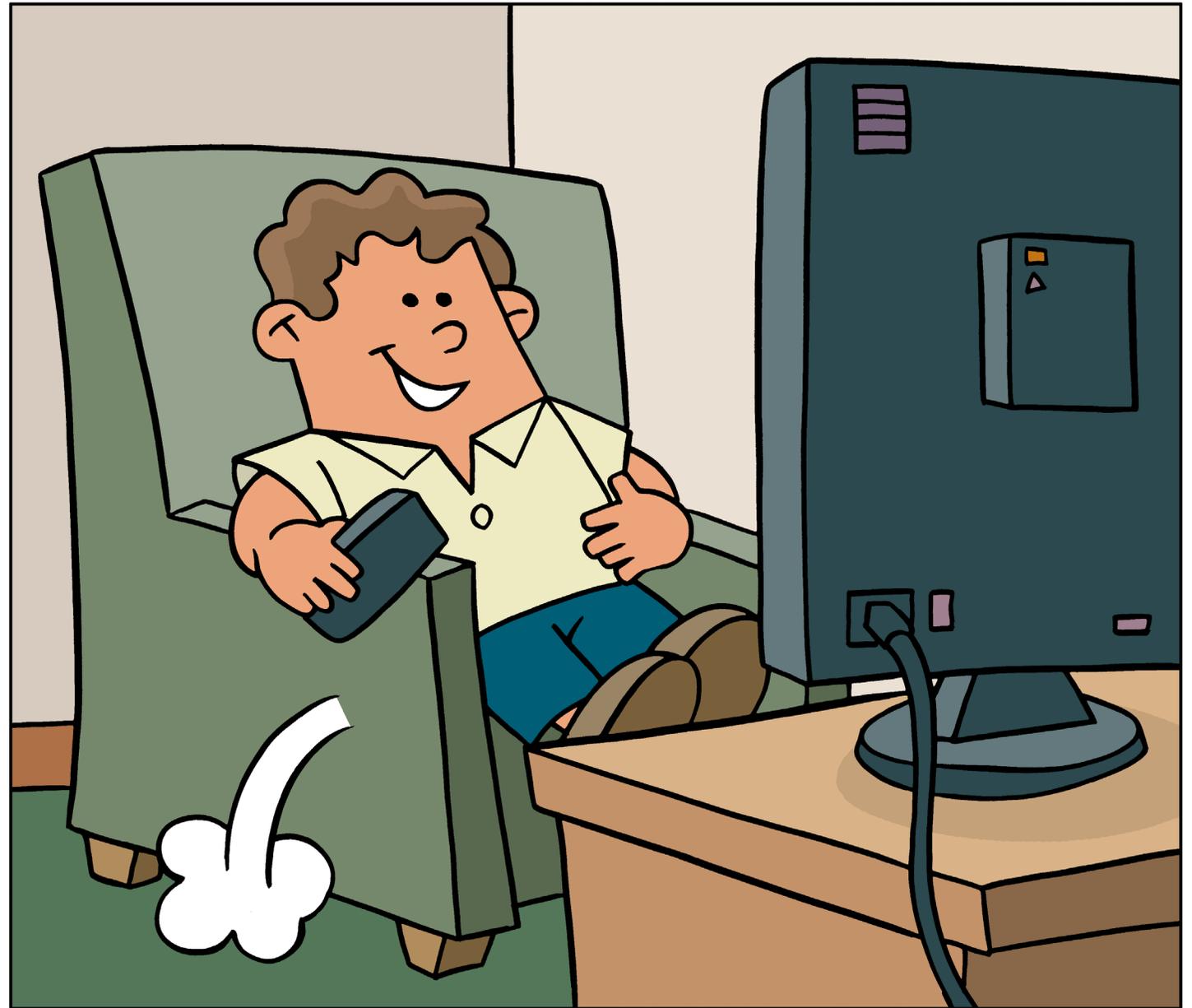
ロバートはリビングルームに
かけこむなり、ソファーにドサッと
すわると、手足をのばし、
ねっころがってテレビを見始めました。
しばらくすると、お母さんが赤ちゃんの
妹をだっこして入って来ました。

「ロバート、赤ちゃんのアニーと
わたしも、ソファーにすわっていい
かしら?」と、お母さんがたずねました。

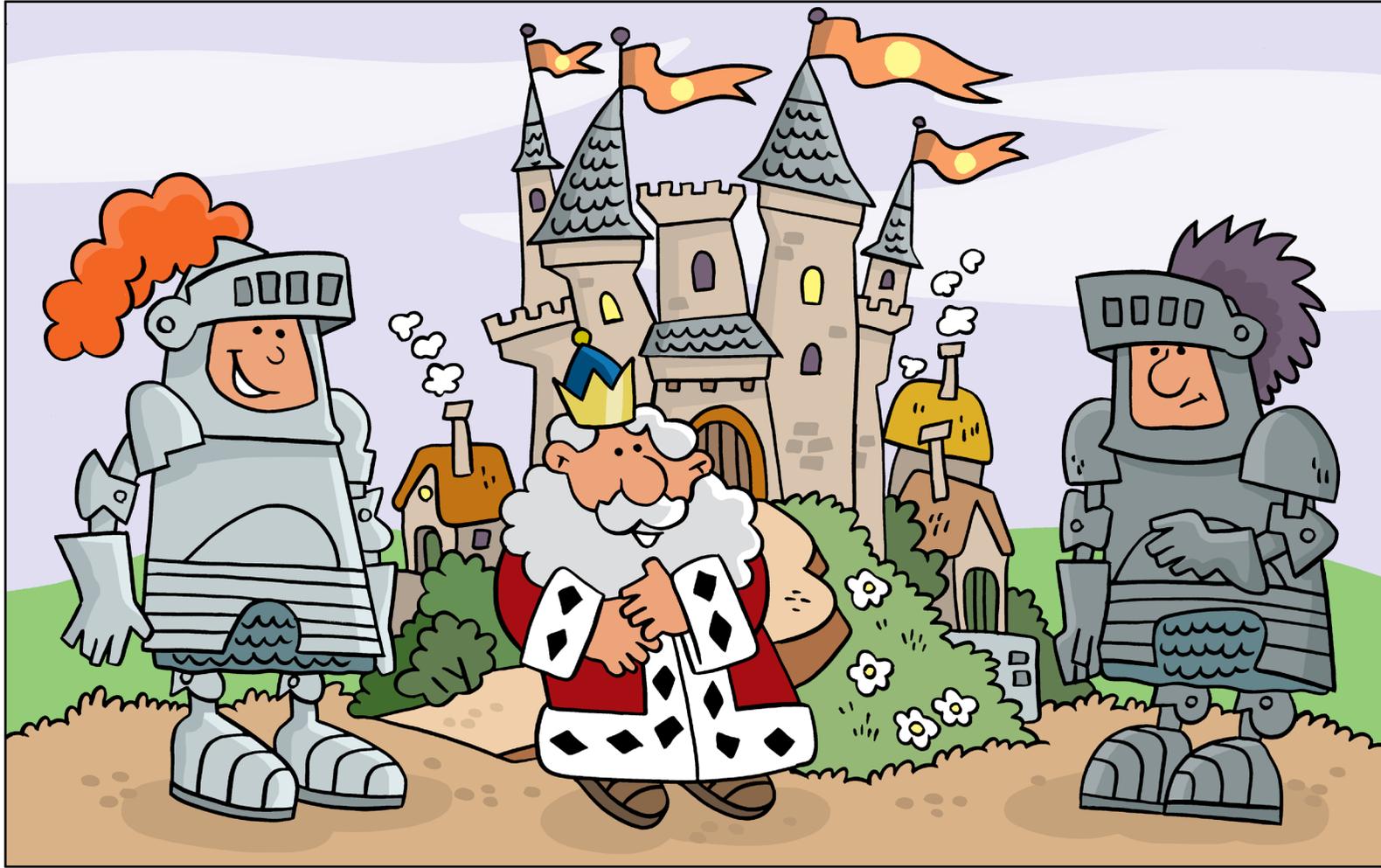
すると、ロバートがうめき声を
あげて言いました。「え〜、お母さん。
今、すごくいい気分なのに〜!
お母さんとアニーは、キッチン
のいすを持ってきてすわったら
いいじゃない。」

「まあ、ロバート。もしあなたが
紳士のようにふるまっていたなら、
アニーとわたしのために場所を
空けてくれたはずなのにね。」と、
お母さんが言いました。

「紳士? 紳士って、なあに?」と、
ロバートがたずねました。



「^{しんし}紳士とは、^{しんせつ}親切で ^{おも}思いやりがあり、^{れいぎ}礼儀正しくて、^{じぶん}自分より ^{ひと}ほかの人のことを ^{さき}先に ^{かんが}考える人のことよ。ある ^{はなし}お話を ^{して}あげるわ。
^お終わったら、^{はなし}お話に ^で出てくる ^{ひと}人のうち、^{しんし}だれが ^{おも}紳士だと思^あうか、^あ当ててみてね。」



^{むかしむかし}昔々のこと。ある ^{りっぱ}立派な ^{しろ}お城の ^{なか}中に、とても ^{やさしい}やさしい ^{おうさま}王様が ^す住んでいました。王様の ^{くに}国には、^{ゆう}勇^{かし}かん^な騎士たちが ^{おおぜい}大勢 ^{いました}いました。
その ^{なか}中に、ニコラスと ^{きし}トリスタンという ^{おうさま}騎士が ^{いました}いました。王様は、この ^{ふたり}二人のうち、^{ほんとう}どちらが ^{きし}本当の ^{騎士}騎士と ^しいえるのかを ^{おも}知りた^いと思^いい、
^{ふたり}二人を ^{ため}試^{して}みることに ^{しました}しました。

^{おうさま}王様は ^{ふたり}二人の ^{きし}騎士に、^{ちか}近くの ^{まち}町へ ^い行って、^{おうさま}王様のために ^{うま}馬を ^か買^ってくるように ^{めい}命^じました。また、この ^{にんむ}任務には ^{とくべつ}ある ^{特別な}特別な ^{こと}ことが ^あるので、^{ぜんりょく}全力を ^いつくすように ^いとも ^い言^いました。

ニコラスは、心のやさしい礼儀正しい騎士でしたが、トリスタンは自分のことしか考えませんでした。

(なるほど!) と、トリスタンは思いました。(王様はきっと、ぼくたちのどちらが最高の騎士かを知りたいのにちがいない。ぼくが最高の馬を見つけられることを、証明するぞ。)

「今すぐ出発する

ように。日の入りまでには馬を手に入れたいからのう。」と、王様が言いました。

「かしこまりました、王様。お望み通りにいたします。」と、二人の騎士が答えました。

トリスタンとニコラスはすぐに馬にまたがると、王様のための馬をさがしに、全速力で馬を走らせました。

とちゅうの道で、二人は重い荷物をかかえたおばあさんに会いました。



「道を空けよ！ わたしは王の
ご用でいそがしいのだ！」と、
トリスタンはさげびました。

おばあさんは、あわてて
よろめきながら道のわきに
寄りました。その横を、
トリスタンはもうもうと土けむりを
立てながら、全速力で通り過ぎて
行きました。かわいそうな
おばあさんは、土ぼこりで
せきこんでいます。

「どうどう！」ニコラスは
かけ声をかけて、馬を止めました。

「こんにちは！ そんなに大きな
荷物をかかえて、どちらへ
行かれるのですか？」ニコラスは
やさしく声をかけました。

「近くの町へ行くとちゆうです。」
と、おばあさんが答えました。

「お手伝いしますよ。わたしの
馬で、目的地までお連れしましょう。」

「まあ、何てやさしい騎士の
方なのかしら！ ありがとう
ございます！」おばあさんは、
にっこりしながら言いました。



ニコラスは、トリストランより
しばらく おくれて 町に 着きました。

「お主は、どこにいたのだ？ なぜ
そのように 時間が かかったのか？」

トリストランが 問いつめました。

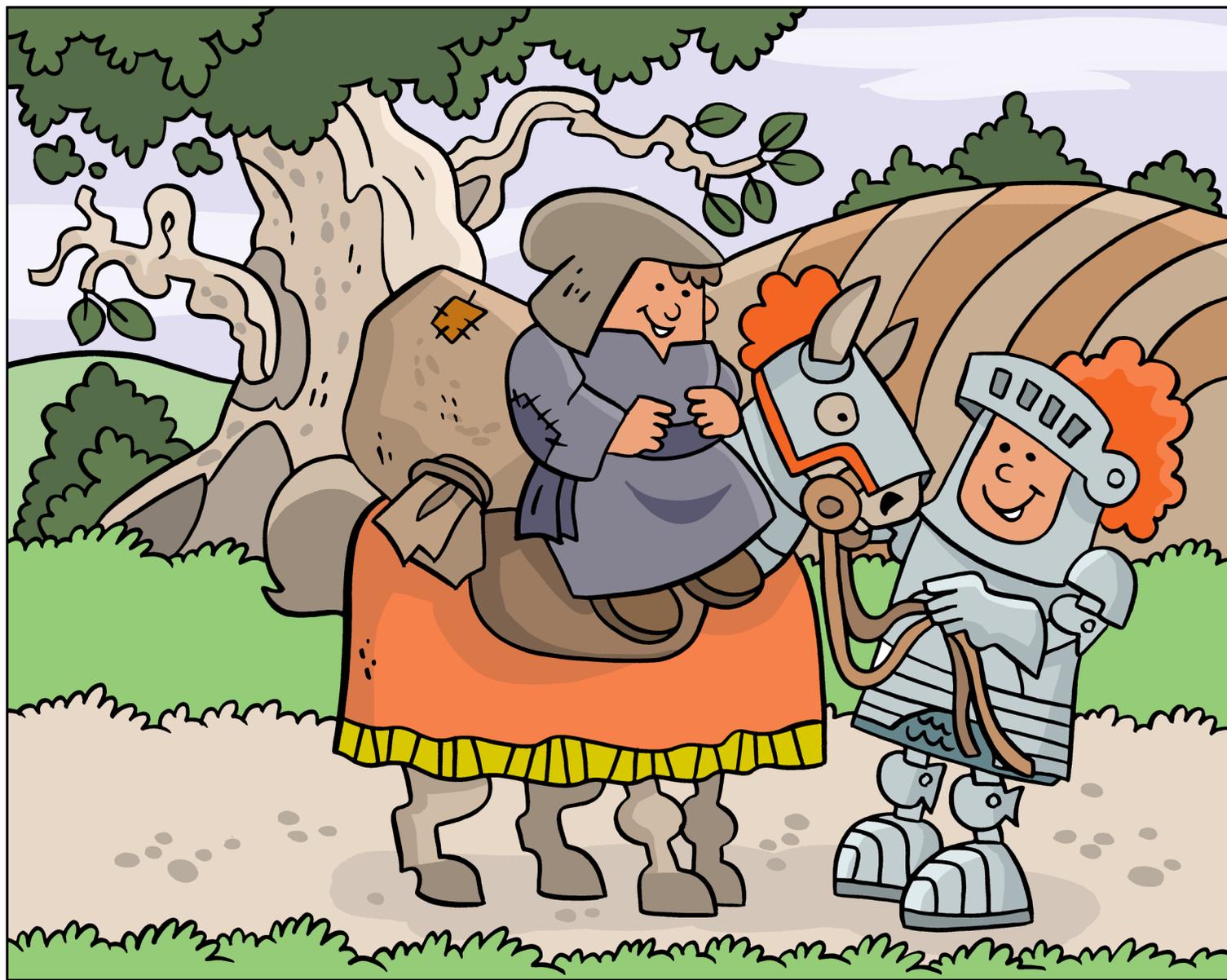
「重い 荷物を持った おばあさんを
手伝っていたのだ。」と、ニコラスが
答えました。

「時間の むだではないか！ さあ、
どこで 馬を 買えるか、だれかに
聞いてみよう。」と、トリストランが
言いました。

パン屋が 焼き立ての パンを
お店に 出していると、トリストランが
どなりつけました。「おい、その
パン屋！ わたしは、王のご用で
来ているのだ。この 町で 馬を 売って
いる人が どこか、教えなさい。」

「あちらの かじ屋の となりで
ございます。」 おどろいた パン屋が
あわてて 答えました。

トリストランが 言いました。
「ご親切に、ありがとうございます。
それにしても、おいしそうな
パンの においですねえ！」



「さあさ、おひとつどうぞ。」
そう言いながら、パン屋は
ほほえんで二人の騎士に
あたふたりた温かいパンを一つずつ
てわたひと手渡しました。

「それはそれは、どうも
ありがとうございます。」と、
ニコラスが答こたえました。

トリスタンはパンを受け
と取ると、ふり向いてお礼を
い言うこともせず、さっさと
あるさ歩き去ってしまいました。

売うられている馬うまを一通り
みあとふたりおさま
見た後、二人は、王様が
ぜったいきにいりそうだと
おも思とうった、ある1頭の馬を
か買きうことに決めました。

「あそこにいる大きな
しろおおいのがいい。あれなら、
おうぜったいきい
王は絶対に気に入って
くださるだろう。」と、
トリスタんが言いいました。

「でも、わたしたちもあの
うま馬がほしいんです。」二人の
きしうしちい
騎士の後ろから、小さな
こえ声こえがしました。



ニコラスとトリスタンがふり返ってみると、少女と彼女の弟がいました。自分の家族の農場のために、馬を買いに来たのだそうです。「そりゃ運が悪かったな。だが、わたしたちが最初に見たのだから、わたしたちのものだ！」トリスタンが荒々しく言いました。すると、少年がしくしくと泣き始めました。少女は言いました。「わたしたち、この馬を買うために、長い間お金をためてきたんです。わたしたちの農場では、このような馬がとても必要なんです。」
「だが、王も馬をご入り用なのだ。」と、トリスタンが言いました。



ニコラスが ^い言いました。
「トリストアン ^{おう}王は、この ^{ひと}人たちに
^{うま}馬を ^ゆゆる ^{こと}を ^おお望みだと
わたしは ^{おも}思うのだが。王が
^おお気に ^め召す ^{うま}馬なら、きっと
ほかにも ^み見つかるはずだ。」

「だが、わたしたちが
^{えら}選んだのは、この ^{うま}馬ではないか。
どうしてほかの ^{もの}者たちに
ゆるらねば ^{なら}ないのだ?」

すると、その ^{とき}時・・・王様 ^{おうさま}が
^{あら}現れました。「それは、そうして
ほしいと ^{のぞ}わしが ^望んで
おるからじゃ。」

「王様!」 ^{おうさま}声を ^{こえ}あげると、
トリストアンと ^{あた}ニコラスは ^頭を
さげました。

「こちらに ^き来ていらっしやるとは、
^{そん}存じ ^あ上げませんでした。」

「そなたたちの ^{あと}後をつけて
^き来たのじゃ。道中、^{どうちゆう}真の ^{まこと}
^{しんし}紳士らしく ^{ふるま}っているか
どうかを ^み見にな。」



「そなたたちは二人とも、とても
勇かな騎士ではあるが、騎士で
あるということは、それだけでは
いかん。ほかの者たちに対して、
親切で紳士らしくふるまうことも、
騎士になるためには必要な
ことなのじゃ。」

わたしや王国への二人の
忠誠心にはとても感謝しておるが、
紳士であることや、わが民への
思いやりや礼儀正しいふるまいも、
それと同じく大切なことじゃ。
わが騎士であるということは、
わしの代わりでもあるからのう。
もしそなたたちが人々に対して
不親切だと、民は、わたしも
不親切なのだと思うことじゃろう。」

☺

「ごめんなさい、お母さん！
紳士だったのは、ニコラスのほう
だよ。ぼくも、ニコラスみたいにな
りたいな。紳士になるためには、
どうしたらいいの？」と、ロバートが
たずねました。



「紳士というのは、自分のことばかり考えるのではなく、親切になって、ほかの人たちのことを考えるということね。例えば、もしだれかが大きな物や重い物を運んでいて、手伝いが必要そうだったら、ドアを開けてあげたりね。買い物では、物を運ぶのを手伝えるわ。お年寄りが部屋に入って来て、すわる所がなかったら、立って自分の席をゆずってあげられるわね。ケーキを食べる時には、ほかの人に一番大きいのを取らせて

あげるといいわ。だれかにぶつかったら『ごめんなさい。』と
言うことね。こういったことは、
いくつかの例に過ぎないわ。
紳士とは、いつでもだれに
対しても、思いやりがあって
親切なの。」と、お母さんが
言いました。

「ぼくも、やってみたい。やり
直してもいい?」と、ロバート。
お母さんは赤ちゃんのアンニーを
連れて、部屋を出ました。
キッチンでちょっと待ってから、
またリビングルームに入って
来ました。部屋に入ると、
ロバートはぱっと立ち上がり、
深々とていねいなおじぎをして
言いました。「いいお日和です、
お母様。お席はいかがですか?」

「まあ、それが本当の紳士と
いうものね!」

